

Gan Pyakhanの密教的世界 について

—マンダラとムドラからのアプローチ—

一 柳 智 子

はじめに

ネワール族の人々によるGan Pyakhanは、秋期の大祭ダサインの中で踊られる踊りである。この踊りは、宗教的意義が深く、娯楽性の極めて少ないものである。

本研究は、このGan Pyakhanの空間構造をマンダラ絵図の構成に対応させ、またムドラを印契に対応させて、Gan Pyakhanの中の宗教性(=密教性)を考察することを目的とする。

1. Gan Pyakhanの投射平面構造とマンダラ絵図

Gan Pyakhanの舞踊の場における神々の位置を二次元に投射し整理して、図1のような主に二重の同心円と二重の同心方形が交互に内接した図形が得られた。

外側から各線を説明すれば以下のような³⁾である。

- ・「土壇」(正方形)

Gan Pyakhanの踊られる舞台は正方形の土壇である。

- ・「神々の座」(円形)

Gan Pyakhanの演劇的展開の中では終始円形の神々の位置が決められている。この閉鎖的な円の内部で踊りが展開されている。

- ・「Ganesha」(正方形)

第Ⅳ場第1景のガネーシャのソロのために土壇上の神々の座の内側に正方形に白い線が引かれる。また、他の場面ではバイラヴァとチャームンダーがこの正方形の白線上を踊ることもある。

- ・「Performance」(円形)

全ての神々が登場する場合は、必ずこの円上である(バイラヴァを除く)。また、ガネーシャのソロのあとアシュタマートウリカがこの円上でガネーシャを囲む場面もある。

- ・「Bhairava」(中心)

バイラヴァは、神々の座から離れて登場する場合は、必ずこの中心に位置する。

以上のように得られた幾何学的図形は、密教の世界観を表わしているといわれるマンダラ絵図の構成を想起させるものである(図2参照)。

円と正方形の組み合わせによる構成という点において、マンダラ絵図の構成とGan Pyakhanか

ら得られた図形の構成は類似しているといえる。そして、このことによりGan Pyakhanの空間構成の発想は、マンダラ絵図の発想に類似もしくは同一していると考えることができよう。なぜならば、Gan Pyakhanのみならずネワール族の人々の宗教生活の中にマンダラ絵は深く根ざっていて、現に今日においても宗教行事の中で頻繁にみられるからである。

2. Gan Pyakhanのムドラと印契

Gan Pyakhanの舞踊動作のうち最も特徴的な点の1つは、ムドラの使用である。さらにそのうち最も頻度高く神々に共通してみられるものは、写真1のような型である。両腕は肘までは平行に下におろしている。前腕部は、右腕は上にあげ左腕は右前腕部より低い位置におく。そして左手の親指と中指をつなぐ⁴⁾。この型は、インド古典舞踊のムドゥにはみあたらないが、この踊りの宗教的背景から考えると、密教の宗教的実践方法の中の1つである「印契」に対応できよう。

マンダラ絵図の中の尊像の象徴的属性表現の1つにこの印契が用いられている。また、仏像においては、属性の他にその仏の悟りの状態をも象徴することがある。写真1のような動きを伴わない型で象徴する方法は、こうしたマンダラ絵図や仏像の型によるのではないかと思う。図3のマンダラ絵図の中で中尊の釈迦牟尼が結んでいる印契は、きわめてGan Pyakhanのものに類似していて、その可能性を示しているものといえよう。

まとめ

以上のように、Gan Pyakhanは密教におけるマンダラと印契に深い関わりをもった踊りであるといえよう。

ネワール族の人々の生活は、非常に宗教とは切り離せないものであり、舞踊もその例外ではないのである。ネワール族の人々の密教的世界観(=マンダラ宇宙)を色濃くその要素にもつGan Pyakhanは、いわゆるマンダラ舞踊とでも呼べるものであろう。

脚 註

- 1) 「マンダラ」とは、サンスクリット語であり、「本質、心髄を有しているもの」「壇」「道場」「円輪」「区分」「境」「集合」などの意味をもつ。しかし、今日我々が一般的に言う「マンダラ」は、密教的パネオンを集合図として表した絵図を指している場合が多い。
- 2) 「印契」は、サンスクリット語の「ムドラ」の密教における訳語である。本研究では、密教関係のムドラと区別するために「印契」を用いた。
- 3) 点線は、実線上にのらない部分の位置を示している。また、神以外の人物の登場する場面とランダム

な動きについての図形化は割愛した。

4) 右手の指の型については、現段階においては正確に把握することは不可能である。

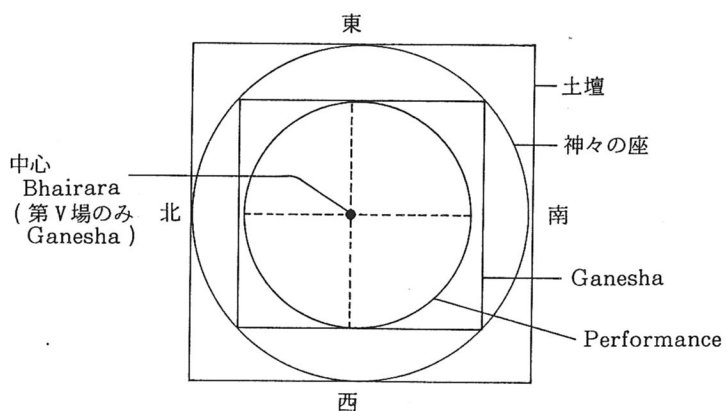


図1 中心Bhairavaに収斂されるGan Pyakhan空間構造

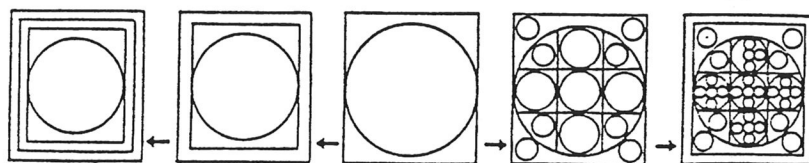


図2 山折哲男氏によるマンダラ絵図の図形化
 (「マンダラと印」『講座密教4 密教の文化』P.183より)



写真1 バイラヴァに特徴的な印契(中央)



図3 釈迦曼荼羅